

大隈言道自筆資料『自詠集中抄』

— 言道門下小林重治歌集 — (二)

進藤康子

前回に続き、江戸時代後期に活躍した福岡の歌人、大隈言道の自筆新資料を紹介する。

言道門下の小林重治の歌集『自詠集中抄』は、飯塚歌壇の当時のおもかげや、門下生同士の歌集の貸し借りの様子も詞書などから看取できる。また、この歌集を添削および清書した、師言道の指導方針をかいまみることはもとより、のびやかな言道の筆の跡をも辿ることができる好資料であり、この和本全体が、鑑賞に堪えうる芸術作品である。前号の続編として翻刻し、言道の門下指導の一資料として考察していきたい。翻刻に於ける凡例は、前号参照のこと。

67. みそきするしてのしらゆふ打そよき
あきをまねきてかは風そふく
68. 後のよのひとひくにちかくなる
かねの音にもおとろかすして

69. 今そひもときそめにける小萩はら
野かひのうしはおひなはなちそ
70. いりひさすこす糸にあらしふきぬれは
何にまとふ夕からすかな」(9・ウ)
71. 冬かれのさひしきみねのひとつ松
をりくくものかゝる計を
72. なかゝきにおふる夏木のしけり相て
となりをうとくなせるころかな
73. 故郷のあさちかはらになくむしの
かはらぬこ糸に昔をそおもふ
- うしのむれて川をわたるを見る

74. ゆきのしまゝきの子うしの群道も 「(10・オ)
野川さをとりわたるなるかな

75. たちこめてそこともわかぬ霧のうちに
とりなくかたや家路なるらん

76. あけぬれはほふ朝日にさきたちて
まつ立のほる山の秋霧

77. おとたへるをきのうはゝの夕風に
しかのなくねをそへてきくかな

78. としをへてくつるゝ軒のいたひさし 「(10・ウ)
人の身ほともなくて折けり

79. あさ夕にうることをのみおもひつゝ
わかよをつくす市のいへのうさ

80. つねはたゝひとつたかねと見えにしも
ゆきふりわくるをちのやへ山

81. てる月のかつらのさとおひのやと
くもゐにねたるこゝちこそすれ

82. いかはかり寒からましを冬夜の 「(11・オ)
あらしのうちにすめる月影

83. みやこへにみつきはこふとさわくこそ
しつけき御世のしるしなりけれ

84. わかれちは君のとりはくつるき太刀
身をきりておくこゝちこそすれ

うらのしほかひてふうたの集を
ともよりかしてよといひやり
ければよみそへてつかはしける 「(11・ウ)

85. さきたてる君にしほかひゝろはれて
冬のうなひをおくれてそゆく

86. をみなをいむとふてらのいけのうへに
何故をしのつかひすむらん

87. いけのうへにすむみつとりもあるはうき
あるはしつみてよをわたるなり

88. あとつくる人いとひてやしらゆきの
さよふけてのみふりつもるらん 「(12・オ)

89. とふ人もなき山さとのゆきのひは

ほたひのなかに^ほともなかりけり

90. てるをまつ人のこゝろにひきかへて

としのはつるをくゆるすみかま^冬

91. なそもかくはしきる計としのをの
ことしはつきてみしのこるらん

92. はるかすみ立のくせともうくひすの

こゑはかくれすきこえけるかな」（12・ウ）

93. うくひすのなくねにうめの花までも

うれしときけやゑみさかにぬる

94. けさはまたてるのあらしのさむきかな

冬やいつこにのこりぬつらむ

大石良夫

95. うかれめのひさの枕もそらゑひも

ちゝにおもひはやましなのさと」（13・オ）

96. わきもこかそてひかせしとおもふ身に

など人つまのかくはこひしき

97. かすならぬ身にもゆくすゑとやせまし

かくやせましの望ありける

98. かすくにものおもふこともゑひぬれは

さけてふなをはうへおほせけり

わかれのうた

99. をりくは道の並樹^{の花}を見て

おもひも」（13・ウ）

いてよわかまつとたに

100. なによりもおくられにけるわかれこそ

たひゆくおのかおもになりけれ

101. こゝさすかたもなければとくもをたに

はなとも見むといてしけふかな

102. さくらはないつさかましときのふまで

おほくの人をまたせつるかな

- 103． はなさかり雨もあらしもなきひ暮」(14・オ)
 わかこゝろのみもてさわきゝけれ
- 104． まきあくるをすのうちに花ちれは
 にくゝもあらぬ今朝の山風
- 105． えたさしてそのゝ竹のこしける也
 ことしの夏のかけにこそせめ
- 106． をちこちにおほくはあれとむらやまの
 おなしすかたのみねたにもなし」(14・ウ)
- 107． ほとゝきす雨ふりなからなくこゑに
 まちし心ははれにけるかな
はるゝ夕くれ
- 108． とみくさといふなにめてゝこゑたれと
 さるしるしなきやとそはかなき
- ある人竹のよみなかきを
 きせるのさをかしてとおくりけるに
- 109． うきふしもなきこの竹に身をなして
 わかよもかなとおもひける哉」(15・オ)
- 110． さみたれに小田の畝こすみつのうちに
 なかれしとてやかはつなくらん
- 111． あせこゆる水におとのみのこしつゝ
 さ月の雨ははれにけるかも
- 112． こをもたてさひしきやとはなてしこの
 花よりなこそゆかしかりけれ
- 113． 夏竹のしけれる下やなかるらむ
 野中のしみつ音はかりして」(15・ウ)
- 114． さよ中にわかやのかとをはやたちの
 こまやすくらんすゝのきこゆる
- 115． むまやちのかりの枕の夢のうちも
 たゝめこともものはかりして
- 116． 花のはる月の秋とてたのしめは
 うき風とくもなきよならなん
- 117． わかやとはをむき大麦からたきて
 かやりに夏のよをあかす也」(16・オ)

118. なつよゆくわれよりさきにおとろきて
さわたるへひのくさかくれつゝ
119. 六月の日にたにぬかぬみのむしは
夕立雨のまたもふるかと
120. 市中にすめはまつふくかしたにも
松にきゝつゝおもしろきかな
121. いくたひもはらひのくれとやかてまた
わかひさにしもあからかひねこ」(16・ウ)
122. みたれたるむかしおもへはせきのとに
いりし夕日のかけあはれなり
121. こよひこそあつさもしらすふねうけて
夏の
うきよの 外にてにけり
122. おろかなるわか身のほとをかきぬれは
筆のこゝろにはつかしきかな
123. あさなく川のおさせにうつきりの
立もとまらずなけれける哉」(17・オ)
124. いろにてゝ糸ひつゝたてるをみなへし
何所のたれになひくすかたそ
125. あきことにきなれをりせはかりかねも
くもちのきりに道まよはまし
126. みちのへにふみひしかれしはき迄も
あきは秋とて花さきにけり
127. うらやまし秋の夕のさひしさも
しらてしほめる薺花」(17・ウ)
128. わかむねのうちのこたちはしけれども
ひまもとめつゝ月を見るかな
129. あまりにもてる月かけのあり明に
さしわすれやとさゝぬまとかな
130. 一人見るこゝろはくものうへまでも
かよふか月のこゝにさやけき
131. くれたけのひとよくにかけまして
はこしの月のおもしろき哉」(18・オ)

132 うるし川ゝへを行はゆく水の
おもにみちたるありあけの月

133 わたつみのうしほもにはにみちかほに
てらせる月のかけをみるかな

134 くれもあへすそらにのほれる長月の
今夜も月におくれてそみる

135 うらゝなるはるひとゝもに伸にけり
たゝひとすちのうめのたちえは」(18・ウ)

(つづく)